

ケア万全 居酒屋「大作戦」

地域医療の最前線で 3

現場へ！

きながらも、ベッドサイドに立ち上がった。

大分市の旧佐賀関町内にある「ナーシングホーム輝」。社会医療法人関愛会が運営する有料老人ホームである。

治療は終わったが、引き続き医療的ケアが必要——。そんな住民が暮らせる場として2015年に設立した。「病院のベッドは増やさない」という国の政策に沿いつつ、地域のニーズに応じた取り組みといえる。

Kさんが「輝」に入居したのは、立ち上がる1カ月前の昨年10月。気管切開をした大病院から救急車で運ばれてきた時は、目を開けることすらしんどそうだった。

入居者22人のうち人工呼吸器をつけているのは、Kさん含めて4人。管理者である看護師の上本文子(66)は「病院ではないので検査機器などはありません。でも、ベテランが多く経験値は高い」と話す。食事や入浴

など生活を支えるケアは「輝」所属の介護職が担うが、医療やりハビリは、訪問診療する医師と、訪問看護ステーションの看護師、理学療法士らが担う。

自力で立ち上がった日からさらに1カ月後の12月上旬、Kさんを外出させる「大作戦」が挙行された。

医師、看護師、呼吸器を管理する臨床工学技士、ケアマネジャー、言語聴覚士、運転手……。10人以上が「作戰」に参加し、大塚の姿もそこにあった。

行き先は車で10分ほどのなじみの居酒屋。「いつもの席」に座ったKさんは、誤嚥しないよう言語聴覚士が見守るなか、ビールをほんの一口飲んだ。30分ほどの滞在中、表情は明るく生気に満ちていた。

Kさんの長年のパートナーで居酒屋を営む女性は感銘を受けていた。「たくさんの人に支えられていることを実感した。日本に暮らしていて良かったと思った。こうした話が広がれば、同じような病気の人を勇気づけることになるのでは」

Kさんが外出できたことで病院や介護施設に、何か報酬が入るということはない。だが、サントクロース姿で参加した坂ノ市病院長の管聡(52)ら、ケアに携わる職員にとっても仕事を楽しい大事なイベントだった。

敬称略(浜田陽太郎)

それは、ちょっとした「奇跡」のように見えた。

人工呼吸器をつけたALS(筋萎縮性側索硬化症)のKさん(70代)は、ちよつとぐらつ



声が出にくくなったKさんとは文字盤を使ってコミュニケーションをとる

人工呼吸器をつけたKさんは、サンタ姿の医師に見守られながらワゴン車に乗り込んだ。2021年12月、いずれも大分市



患者の生活全般をコーディネートするMSWの大塚奈々